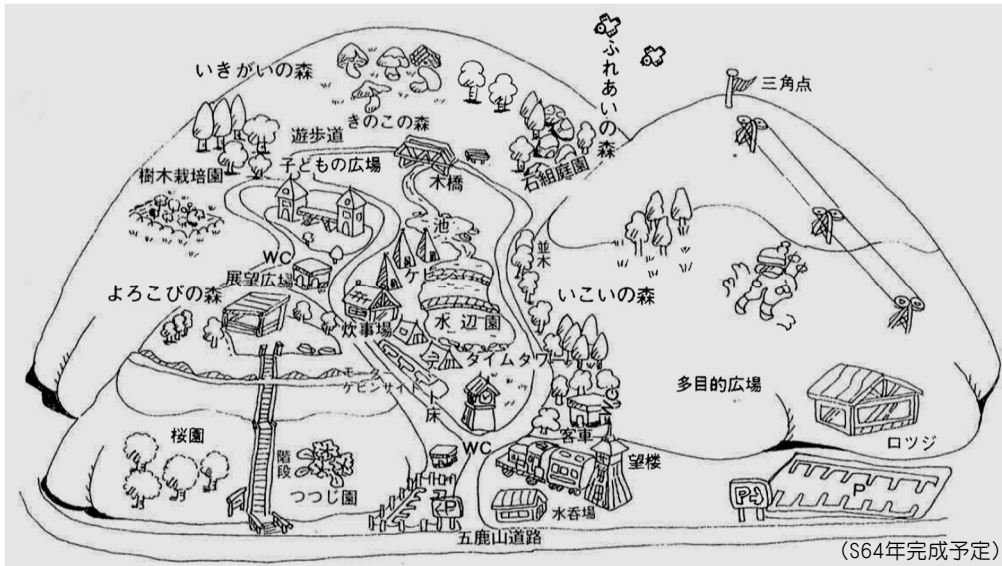


《五鹿山整備計画～自然を残した観光基地に～》



(S64年完成予定)

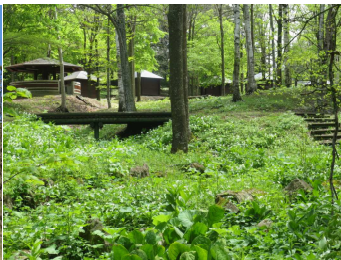
昭和60年(1985年)、道の「緑のふるさと整備事業」を導入した上湧別町は、総事業費1億5,000万円(道の補助2分の1)、5ヵ年計画で、五鹿山を「自然を残したリゾート型の観光基地」にする整備事業を開始した。

展望広場、遊歩道、水辺園地、子どもの広場、野外炊事場、ログハウス、ロックガーデンなどが計画的に整備されていった。

「施設整備と並行して、つつしやシャクナゲ、桜、梅、オノコ、高山植物などの植栽も大がかりに行われた。とりわけ樹齢90年の桜や7,000本が咲き乱れるつつし、3,000株が紫の競演を繰り広げるショウブは見事である。150種もの貴重な高山植物がみられるロックガーデン(高山植物園)は評価が高い。……(平成9年刊「開基百年 上湧別町史」より)」



〈ロックガーデン跡〉



〈水辺園地周辺〉



〈多目的広場入口〉

〈現在の五鹿山の“姿”は、この“整備事業”が土台になっている〉

町のシンボル

五鹿山

「誰に聞いても確かなことは判らない 五頭の鹿がこの山を根城に生息していたことから『五鹿山』と呼ぶようになったと、言い伝えられている」
(澤口政一さんの「案内」より)

眺望絶景・五鹿山

「五鹿山は中湧別市街から東へ2km離れた標高125.5mの小さな山だが、オホーツク海やサラマ湖を一望でき、四季折々の変化も素晴らしく、古くから桜の名所として春は町内外の花見客が訪れ、冬はスキー場として利用されていた。これらの土地が私有地のため、昭和50年代(1975～)まで特別な整備は行われていなかったが、上湧別町は観光拠点として開発整備する構想を打ち出し……用地買収を行い……昭和59年(1984年)、五鹿山一帯(約55.2ha)を町立公園に指定した。」
(平成9年刊「開基百年 上湧別町史」より)



おすすめ
案内人

五鹿山の魅力 澤口 政一(東町在住)
五鹿山の草花 白幡 美栄子(港町在住)
(写真協力 五鹿山の野鳥 山本 昇(緑町在住))

《桜の名所・スキー場誕生の背景》 (屯田兵制度と澤口家)

蝦夷地警備のために、兵役の訓練義務と入植地の開拓が課せられている屯田兵制度に応募した「屯田兵とその家族」は、内地から蝦夷地（湧別）へ向かう船内での抽選によって入植地が割り当てられた。

屯田兵・澤口作一一家が入植した北兵村二区は、湧別川の東・山裾から広がる高台に位置し、土壌は浅く地層は重粘土地帯で、畑作には不向きな土地柄で、生活水は山からの小川に頼る苦しい生活だった。

充てられた土地の営農環境に将来の不安を抱いていた澤口家は、畜産奨励のための「国有未開地処分法の制度」を活用し、すぐ近くの丘陵一帯（五鹿山周辺）の国有地90町歩の払い下げを受け、乳牛飼育牧場経営に着手した。五鹿山周辺は、乳牛飼育の牧草地に開墾され、春から秋まで、牛の日中放牧が行われた。

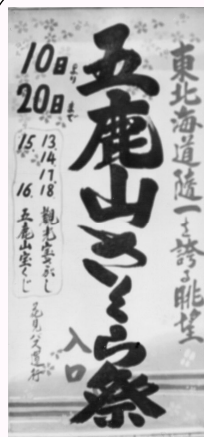
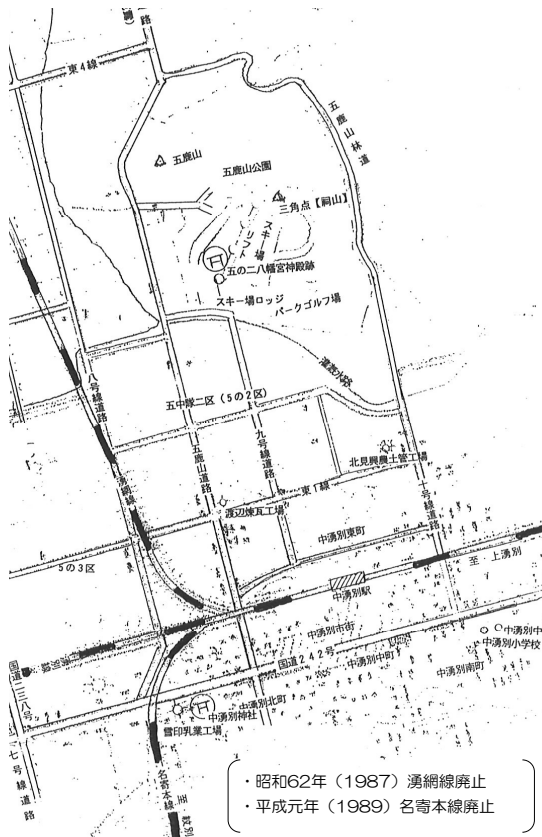
五鹿山はどんな山？

★五鹿山と三角点を取り囲み、湧水と小川の一帯は、アイヌ人の竪穴住居跡があり、石斧・黒曜石の矢尻・粘土土器が開墾地から見つかった。

★現在の五鹿山スキー場リフト北側・町道9号線を中心に見渡す中腹に、明治34年、五の二屯田の守り神として「五の二・八幡宮神殿」を建立、昭和26年中湧別神社に合祀されるまで、地域住民の拠り所であった。

★北海道では都市部以外はまだテレビの普及が遠い先のことと思われていた昭和35年夏、「札幌・手稲山山頂からの電波が受信できそう」との話があり、三角点の頂上にアンテナを立てた。受信した電波を有線にして中湧別市街に送信、150戸程が加入したという。朝6時～8時、昼11時～14時、夕16時～21時HBCのみの放送の映り具合は満足できるものではなかったが、多くの人がテレビの前に集まりクギ付けになった。

・昭和62年（1987）湧網線廃止
・平成元年（1989）名寄本線廃止

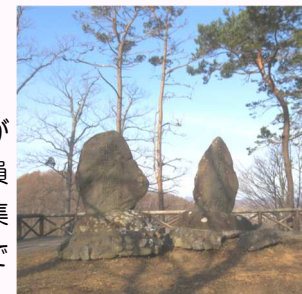


＜桜の名所・五鹿山＞

明治37年、日露戦争が勃発した当時、戦争には屯田戸主が招集される決まりがあった。戸主・澤口作一は芭露にて教員の職にあり兵役免除、代わりに弟が招集され、弟は千島・占守島近海の軍艦内で戦病死した。

作一は、慰霊に占守島を望む五鹿山北斜面に蝦夷山桜の幼木80本余りを植樹し、放牧牛に踏み倒されないよう囲い、育てた。

五鹿山は、年々見ごたえのある桜の山に成長した。



＜弟の戦病死を慰霊する碑＞

昭和29年、初めて中湧別商工会が企画した「五鹿山・桜祭り」は、年を追って大々的な観光イベントに発展した。名寄本線、湧網線に臨時列車が運行され、中湧別駅から五鹿山に向かう観光客の流れは絶えず、演芸舞台が設けられた花見会場は、歌や踊りで盛り上がり、電灯を配した夜桜にも多くの客が訪れた。



＜盛況の五鹿山花見会場・昭和39年頃＞

＜五鹿山スキー場＞

五鹿山は、桜の立木が危険だったが、放牧地で雑木等がない山だったため、冬場は格好のスキー遊び場だった。キー協会会員のボランティアによって立木を伐採し、現スキー場の原型が完成した。



＜昭和51年頃の五鹿山スキー場＞

昭和26年2月、スキー愛好者によって「第1回オール湧別スキー大会」が五鹿山で開催され、回転や距離競技が行われた。大会は盛況だったが、開催場所としては桜の立木が多く危険すぎることから、三角点側にスキー場を作れないかとの声が上がった。

昭和37年、澤口正雄（土地所有者）の協力を得て、三角点山頂から西斜面を下り、中腹で折れ、北向きに下りてくる斜面をスキー滑走コースに決め、スキー協会会員のボランティアによって立木を伐採し、現スキー場の原型が完成した。

（※このページは、澤口政一さんがまとめた「五鹿山案内・資料」を基に作りました。）